

一夜の過ちから始まる

たーなひ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“一夜の過ち”

酒に酔って、あるいは雰囲気、あるいは流れに流されてやつちまうことだ。

そしてそれが、“恋”という形で尾を引くことも極稀にある。

いや、でもさ……

「……なんでこうなった？」

「なに言ってるんだい？ダーリン」

始まりは、一夜の過ちだった。

目次

一話	酒は飲んでも	1
二話	こういうのって次の日に大体後悔するよね	12
三話	デイオニユソス・ファミリア	22
四話	茶番。こんなファミリアは嫌だ。	31
五話	リヴィラにて誓う	39
六話	ダンジョンとテレパス	48
七話	主神と、n回目の逢瀬	58

一話 酒は飲んでも

朝。

高く上った太陽の光で、微睡む間も無く意識を覚醒させられる。

(クツソ頭痛え。…てかもう昼過ぎじゃねえか)

かっこつけた導入のつもりだったが昨日の酒でも残っていたのか、もう昼過ぎだというのに時計を見るまで気付かなかった。

「ハア……」

二日酔いの頭痛と二日酔いとはまた違うっぽい原因不明の気怠さで、俺は思わず重苦しい息吐いた。

さて、昨日は何をしていたのだったか。二日酔いで痛む頭を必死に回した。

確か深層の遠征から帰ってきて、帰還祝いで馬鹿ほど呑んで飲まれて……。

そんで……。

(おいおいおいおいおい)

知らず、頬を冷や汗が伝う。

(…そう…そうだ。流れで俺が童貞だって話になって……んで歓楽街の……)

そこまで考えて、俺は隣に目を向ける。

そこにあるのは、ちょうど人ひとり分の、呼吸によつて上下する膨らみ。布団を頭までかぶっているが、はみ出した黒髪は滑らかだ。

「フーーーーー……」

(よし、落ち着け俺。改めて状況を整理するんだ)

まず、大まかな経緯は思い出した。

深層への遠征を終えて帰還した俺たちは、帰還祝いのパーティーをした。

その後、酔っぱらった俺は歓楽街に繰り出し、童貞を捨てるべく道行く娼婦に声をかけた。

面白半分に付いてきた仲間たちの期待を裏切り、まさかの一人目でお相手をゲット。

驚いて声も出ない仲間たちを置き去りに、男と女は夜の街に消えた……。

(つてなんで最後三人称視点なんだよ)

セルフツツコミを入れるほどには落ち着いたが、ついに童貞を捨てたことに実感を持った俺は人知れず達成感に酔いしれていた。

酒の力とは恐ろしいもので、普段なら絶対に来ない歓楽街に来て、その上娼婦を引っ掛け一夜を過ごす……などといった俺にとってのあらゆる意味偉業を成し遂げた。

(…で、問題なのは、行為の内容とかどんくらいやったかは兎も角、その相手すらも覚えていないってことだ)

そう、そこが問題だ。

一夜の過ちだとか、お酒に任せてというのは、普通に俺の倫理観的には“BAD”だ。少なくとも、例え娼婦が相手だったとしても、朝起きて『何も覚えてません』というのは些か不義理に過ぎるだろう。

「……………。…………フーーーーー」

今日何度目かもわからぬ溜息を吐きだした。

(ま、まあ、やっちゃまったもんはしょうがない。とにかく、この子が起

きる前に顔ぐらいは確認しないと…)

ついに、男は意を決した。

(そうだ。俺は冒険者だ！この程度で怯んでどうする！)

が、つい昨日まで童貞だった男には、この—恐らく全裸の女性がいる。しかも童貞を捧げた—布団をめくるには、経験も覚悟も、何もかもが足りていなかった。

(だ、だが…だがしかし！先にこの女性が目を覚ましたとして、そこで始めて彼女を見た俺はどうなる？)

『あ、あ、あ、あの…その…』と、気まづくなってしまふことは必須!!)

昨晚どのような醜態を晒したか分からない初めての女相手に、まともな話が出来る自信などあろうはずもない。

(だが、ひとまず顔を見れば…：…なんか覚悟の準備ができる…：…気が…する。それに、そう。顔を見て何か思い出す可能性もある！)

そうだ。色々な可能性もあるし、その方が確実にベター！

(勇気を出すんだ俺！階層主との戦闘に比べれば…：…まだマシ…：…だ！)

『正直、階層主との戦闘の方がいいなあ…』と零す小さな俺を端へと追いやる。

これが!!俺の!!!!” 冒険” だあああああ!!!!!!

ついに男が!!布団をめくる!!

(あ、なんかこれ、銀魂で見たことある気が…：…ん？あれ？銀魂ってなんだっけ?)

「????????」
「絶句。」

都市有数の冒険者であっても処理しきれない情報が流れこんだためだ。

艶やかな、腰ほどまでであろう長い黒髪。

日焼けではなく、アマゾネスの種族的特徴でもある褐色の肌。

長い手足と、引き締まりながらも魅力的な体。

あとすごいでかい胸。

結論を言おう。

布団の下にいたのは、まごうことなく。

イシユタル・ファミリア。その主力である戦闘娼婦バーベラの中でも、トツ
プクラスの实力を持つ女傑。

Lv3。二つ名は『麗アンティアーネイラ傑』。

名は、アイシャ・ベルカ。

この女傑が隣でスースーと寝息を立てていたのだ。

当然、これは驚くべきことだ。

二大派閥のような規模でなければ、Lv3以上は主力であり、その

名は多くの者が知っている。『麗傑』も例外ではなく、イシュタル・ファミリアの幹部を務める彼女を知らぬ者はそう居ない。

それが、隣で寝ている……つまり、昨晚のお相手はこの『麗傑』、アイシャ・ベルカだったわけだ。

これによつて、男の脳はショート。無理もないだろう。酔つて捧げた童貞のお相手が、まさかのイシュタル・ファミリアの幹部。

例えどんな経験豊富な男であっても、この状況であればパニツクを禁じ得ないだろう。

………が。

確かにこの事実が男に困惑をもたらしたことは間違いない。

だが、そんなことを些事と割り切れるほどの衝撃が、男の脳内を襲っていた。

なるほど。

わかりやすく言うならば、俺は転生者か、あるいは憑依かというやつなんだろう。

かつて西暦2023年を生きていた俺は、どうやら死んだらしい。らしいというのも、俺がよく覚えていないからだ。

まあ、その辺はどうだっていい。

アニメを見て、大学に行つて、友達と遊んで、サークルでサッカーをしたりといった日常の思い出が途切れ、次に記憶があるのは農村での幼少だ。ドラゴンのキーホルダー、戦隊ヒーロー、カタナに憧れる

多くの少年の例に埋もれず、英雄の都オラリオに憧れた少年は、齢10歳にしてオラリオに凱旋した。

まあ、そこからは色々あり、現在に至る…というわけだ。

…で、なにより特筆すべきは、この世界、『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』、通称ダンまちの原作知識があるという点だ。

これらが、二日酔い＋頭痛＋童貞卒業（前世から続く）＋アイシャという特大の衝撃によつて呼び起こされた…といった感じだろうか。

まあともかくとして、晴れて…晴れて？

俺は前世の記憶を取り戻したのだった。

アイシャ・ベルカ。イシユタル・ファミリアの幹部であり、Lv3の戦闘娼婦^{パラーベラ}。

周囲の団員からの信頼も厚く、面倒見のいい頼れる姉御ポジションを確立している。色欲に忠実ではあるが、彼女を知る者がその人柄を悪く言うことは無い。アマゾネスらしいサバサバした性格とまともにも良いだろう。

だがその人柄故に、彼女はこの上なく無様な『失態』を演じた。

たった一人の哀れな後輩を救うため、彼女は無茶をしたのだった。その代償として、Lv5による蹂躪と、『魅了』という枷をつけられた。それ自体を後悔はしていない。

結果としては問題を先送りにしただけではあったが、彼女の命は先延ばしに出来たのだから。

…とは言ったが、全部忘れて今まで通り生きていけるか、と言われれば当然否だ。

骨の髄のさらに奥まで魅了されつくしたアイシャは、少し変わって

しまった。

(はぁ……)

見る男見る男、全てに興味を感じない。元より誰彼構わずというわけでは無いが、自分よりも弱い男の相手をする気など欠片も起きなかつた。

それも、当然と言えば当然だ。

美の神による魅了は、抗えぬほどの退廃的な快楽と幸福感をもたらす。それを味わった後に、満足に思える夜を過ごせるとは思えなかつた。

(せめて、あたしよりも強い男でも居れば、良いんだけどね……)

あわよくば、あの屈辱的な快楽を忘れさせてはくれないだろうか……。

そんな折であつた。

「へー！その美女!!」

Lv3ともなれば感覚も常人とは比べ物にならないため、音の方向や視線を容易に感じ取る。自分に向けられた声だとすぐにわかつた。ナンパか……と半ば呆れながらも振り返る。

「……おや」

少し、驚いた。

その男は、アイシャも名を知る男だつたからだ。

男の名は、ライ・レインバツク。

若干19歳という若きでありながらLv4に到達した、中堅派閥デュオニユソス・ファミリアの若きエースだ。

「どう？今夜、俺の童貞、貰ってくれない？」

ムードもカッコ良さもへったくれもない、最悪の口説き文句ではあつただろう。

加えて、側から見てもわかるベロンベロンの泥酔状態。

だがアイシヤには、それがちょうど良いぐらいの、都合の良い男に感じた。

Lvで見ても、実績で見ても自分よりも強いのは明らかである上に、伝え聞く人柄もそう悪いものはない。

加えて、ベロンベロンに酔っている訳だから、最悪自分が楽しむ演技が出来ずとも覚えてない可能性もある。

最後に。童貞など久しく食ってないし、童貞なら自分のテクニクがあればどうとでも出来る。

そう結論を出したアイシヤは、妖艶な笑みを貼り付けて答えた。

「良いよ。アンタのハ・ジ・メ・テ。あたしが貰ってやるよ」

自身のとっておきの部屋まで連れ込んだアイシヤは一、二もなく服を脱ぎ始めた。元よりアマゾネスの服装は踊り子以上に薄着で過激であるため、布など2枚か3枚程度だ。

それに、アマゾネスは愛の言葉を囁いたり、風呂で体を洗って清めたりといったまどろっこしいことはしない。

『オラア！脱げえ！勃てえ!!行くゾオ!!酒池肉林じゃうおおおおお!!』みたいな感じだ。

まあアマゾネスと言えども娼婦であるため、一発やってお仕舞い、なんて事にはしない。

が、とりあえずアマゾネスの交尾は全裸になる所からだ。

ライをベッドに押し倒し、手際よくズボンのベルトを外し、下着を破り捨てる。……………破り捨てるう!?

さてさて、新進気鋭若きエースの童貞チ〇〇はどんなもんかな？

そんな、ワクワクした気持ちでソレを見たアイシャはしばし絶句した。

「……………」

デ、デカアアアアイ!!!

(こ、これで……童貞でこのデカさ!?まさか、ここまでとはね!)

経験豊富なアイシャをしてトップを争うレベルのバベルに、知らずアイシャも興が乗り始める。

「……フフ。優れた剣士だとは聞いちゃあいたが、まさか下の方もLv4……いや、Lv5並みだったとはね。驚いたよ」

「……まあ、一度も鞘から抜かれた事もない、まつさらな剣なんですけどね」

「こんな剣の持ち主のハジメテを貰えるなんて光栄だね」

「お、お手柔らかに……」

「安心しな。あたしがちゃあんと、リードしてやるからさ……」

長い長い夜が始まったのだった。

一概には言えないが、こういったコトには勝敗がつく場合がある。もちろんお互いが満足出来ればOKなのだが、先に限界に達する、あるいは気絶する、音を挙げる等々の勝敗をつける手段は存在する。無論、決めなければならぬものでもないし、考えながらヤル必要は無い。

だが、もしも今回、勝敗をつけるとしたら………。

アイシヤの完敗であった!!!

まさに「蹂躪」!!かつて自身のファミリアの団長であるLv5にボコられた時以上に。

そう。Lv5―第1級冒険者―だったのはデカさだけでは無かった!体力!!精力!!技術!!あらゆる面においてLv5……いやそれ以上のポテンシャルを秘めていたのだ。

そして何より、体の相性が良かった。

例えるなら、フレイヤ・ファミリアのガリバー兄弟のように。まさに神レベルの相性の良さこそが、第1級冒険者を誰もまだ見ぬ頂―Lv10へと至るらしめる要因となったのだ。

そして、完全に、完璧に、完膚なきまでにわからされたアイシヤ。

もはや魅了がどうだとか、相手の強さがどうだとかはどうだって良かった。何もかもを忘れて本能に付き従った。

男女はただ、ただひたすらに互いを求め、快楽を貪り続けた。

果たして、二人同時に互いに精魂尽き果て意識を失ったのは、アイシヤの娼婦として：女としての意地だったのか、ライ（童貞）の限界だったのかは誰にも分からない。

(ああ……………この雄だ……………)

ただ、眠りに落ちるその瞬間に実感したこの事実こそが、アイシヤにとって、女にとって何よりも大事な事だった。

目を閉じていても感じる光が少し強くなったことで、アイシヤの意

識が覚醒する。

未だ抜け切らぬ疲労感の中、瞼を開けると、そこには昨日と変わらぬ男が居た。

(ああ、夢じゃ無かった。昨晚の交わりは、高鳴りは……本当だった)

こちらを見て、目があったまま固まっている男。

どうしたのだろうか。

……ああ、そう言えば、彼は酔っ払っていたのだったか。まだ頭がボーっとしているのだろう。

私はただ一つ、確かなことを伝える。

朝方まで続いた長い長い闘いは、私だって事細かに覚えてはいない。

でもそれでも、愛する者と目覚めを共にしたときには。

昨晩声をかけられた時のような貼り付けた笑みではなく、ただ快楽を貪る笑みではなく、ただただ愛しいものへ向ける等身大の笑みに向けて。

「…おはよう」

そこにいたのは、女傑でも、娼婦でもない。

ただの、愛しい男ヒトへとびきりの愛を向ける女オンナだった。

二話　　こういうのって次の日に大体後悔するよね

(……OK。一旦……そう、一旦状況を整理しよう)

未だ混乱は抜けきらないが、落ち着くためにも状況の整理は必須だ。

まず、前世の記憶が甦ったということ。

正直、考えたいことは山ほど、山ほどあるのだが、大体のことは一旦脇に置いておく。

次に、今の状況。

アイシヤが隣で眠っている。つまりは、俺が前世から続く童貞を捧げたのは彼女ということだ。

まあ幸いというべきか不幸というべきか、顔を見たからか昨晚の記憶も大体戻ってきた。

昨晚の互いを求めあう……控えめに言って最高の経験だったと言える。

(あゝ……クツソ良かったなあ……)

これだけ気持ち良いものだと思っただけなら、変に意地を張って童貞を貫いていたりしなかったろう。

できればもう一回……いや、永遠に味わっていたいと思う。

……否、やはりこの際正直に言おう。

惚れました。

ハイ。

いや、聞いてほしい。ワンナイトを共に過ごしただけの関係なのは充分に理解しているし、娼婦相手に本気になるなんてどうかしているという意見もわかる。俺だって、仕事で相手をしている嬢相手に貢い

だり、本気で恋したりするバカな男を馬鹿にしていたわけだし。

しかし、しかしである。

そんな理性を彼方に吹き飛ばすほどに彼女との行為は素晴らしかった。

『いや童貞が何言ってるんだ。一人しか経験なんてないじゃないか』つて言われれば反論などできないが、しようがないではないか。男というのは馬鹿なのだから。

一応さらに言い訳をしておく。

元々、アイシヤ・ベルカというキャラは普通に好きなのだ。信頼出来るし、最初からいい人感あふれていたし、漢気あふれるいい女だし、強いし、スタイルも良いし胸もでかいと、悪い所なんて精々ちよつとえつちすぎるぐらいのもんだ。まあ、原作の描写でアイシヤを嫌いになるような人はそういないだろうが、それでもキャラとして好感が持てるというのは間違いない。

……ちなみに、最推しはリユーさんである。

いや、だった。

なにせ推しランキングは塗り替えられたからだ。

すでに好きな女ランキングでも推しランキングでも二位以下に圧倒的大差をつけてアイシヤがトップである。

ウダウダと言いつつ訳がましくこの恋を正当化したが、結局のところ『一発やって良かったからずっとやりたい』、だ。

(あくあ、アイシヤも俺と同じようなこと思ってくれてれば良いんだけどなあ……)

「おはよう」

その声に、俺は意識を現実に戻した。

見れば、アルカイックスマイル自然な微笑みのアイシヤが挨拶をしていた。

昨晚では見ることのなかった表情にドキリとするが、平静を取り繕う。

「…おはよう、って言ってももう昼過ぎだけどね」

「もうそんな時間か」

「うん。まあ…朝方までしてたわけだしね」

「それもそうだね。…んっ」

伸びをするために起き上がったことで少し声が漏れた上に、その生まれたままの上半身が露わになる。

さすがに俺も直視するのは気恥ずかしく、目を逸らしてしまうが。

伸びによってハア〜と漏れ聞こえる吐息で我が愚息は反応してしまう。

頼む大人しくしてくれという俺の願いも虚しく、布団の上からでもわかるほどに膨らみ始める。

「フフ…」

小さな笑いが聞こえたので見れば、アイシヤは俺の愚息を見ていた。

「や、これはちがくて！…そう！せ、生理現象だから！」

気づかれた恥ずかしさから、まだ何も言っていないのに言い訳らしいものを並べ立てる。

朝までシた後に起き抜けに興奮していると知られるのは何となく不味い気がしたからだ。

一体何が不味いと思っっているのかは自分でもわかっていないが。

しかし、俺の内心を見透かしてか、アイシヤは俺に寄りかかり、その豊満な胸を押し付ける。

「ちよ…あ、アイシヤさん？」

今度は微笑ではなく、女の笑みで俺を見つめて。

「……やるかい？」

「やります」

即答だった。

結局、俺がファミリアの本拠ホームに戻ってきたのは日が沈む直前のことだった。

あれから本当につきさつきまでサカっていたが、さすがに互いに帰る必要があるということ、非常に非つつつ常に名残惜しいが熱い口づけを交わしてから別れたのだった。

で、当の俺だが。

「あの……入れてもらってもいいでしょうか？」

「「無理」」

絶賛締め出され中であつた。

一体何が起こってこうなっているのか……事實はこうだ。

昨晚、ライと帰還祝いをしていたディオニュソス・ファミリアの

パーティーメンバーの男性一行によって、泥酔していたライは歓楽街へと誘導された。

そこで、男どもに予想外の事態が起こった。

ナンパの成功。加えてその相手があの “麗傑” アンティアーネイラ “アイシャ・ベルカ” であつたということだ。

あまりにも衝撃的すぎる展開の速さに酔っぱらつて正常な思考を失つた男どもは、呆然と夜の街に消える男女を見送ることしかできなかった。

そして、思考が戻つてきた男どもはこの衝撃的な事実をファミリアのメンバーに伝えんと、本拠へと即帰還した。

本拠に帰つてきた男どもは、先ほどの事実をファミリアメンバーに言いふらした。

ここで、ややこしいことが起きた。

まず、事実として。件の彼、ライ・レインバックは、同ファミリアの一人の少女から恋心を向けられていた。

だがそれも当然と言えば当然のことだ。19歳という若さでLv4に到達したファミリアのエースで、容姿もそこそこ、性格も問題無い。

加えて言えば、どうやら男どもの話を盗み聞くところ、童貞だというではないか。童貞というのは評価が分かれるところだが、このファミリアの特色でもある高潔な女達からすれば『遊び人・だらしない』よりは遥かに好印象だつた。

実際、ライに好意を寄せる少女も奥手で、控えめな子だったので、童貞と聞いて少し安心した節もあつた。

そして、少女がライを好きということとは女達からすれば周知の事実であつた。気づいていなかったのは本人含め ライ バカな男連中だけだ。

だが、好意に気付かなかつたライ本人が悪いかと言えば、そんなことはない。

少女は奥手でそれほど積極的なアピールをしていたわけではないし、周りも無理に引つ付けようとはしていなかつたのだ。

で、悲劇は起こった。

何も知らぬ男達バカによってもたらされた知らせで、件の少女は悲しみに暮れた。

例え娼婦が相手だとしても、好きな人が他人とやるというのは少女含め女連中にとっては許されざることだったのだ。

だが、周りの女達は決して可能性を捨てなかった。

『だ、大丈夫だよ！何もせずに帰ってくる可能性だってあるし…ね？』と、わずかな希望にすがり少女を慰めていた。

いや、これは一方的な信頼の押し付けであっただろう。彼に命を救われたことは何度もある。だから彼ならば…不可能なことでもきつとやり遂げてくれる。

午前3時。

まだ帰ってこない。口には出さなかったが、女達は『ああ、もう1発ぐらいはやっただろうなあ』と考えていた。

午前6時。

…いや、逆に考えるんだ。聞いた限りではべろべろに酔っぱらっていたと言うのだから、何もせずに爆睡している可能性もある！

午前9時。

……。いや、いや…だ、大丈夫……だよね？

午前12時。

ついに、このあたりで彼を信頼する人は皆無となった。

少女への慰めは、『きつと大丈夫だよ』から『きつと他にもいい人居るよ』にシフトしていた。

午後3時。

もはや悲しみや呆れを超えて、女たちにあるのは“怒り”であった。

午後6時。

もう日が落ちようという時間になって、彼は帰ってきた。

だが、女達は一縷の望みに賭けていた。何もせず、ただ寝ぼけていただけだったのだと、そんなふうに戻ってくることを。

だが、そんな望みは打ち砕かれた。

妙にツヤツヤな肌。

ナニかで体力でも消耗したのか、若干よろつく歩き姿。

そして何より、全身から漂う『俺、一皮むけちゃいました』感。

結果、女たちの怒りは爆発したのだった。

(いや知らんがな)

本拠の前で立ち尽くす俺は、意味の分からない女性陣の怒りに困惑を禁じ得なかった。

「いや、あの、ほんとすみません。や、ほんと」

「あんた、何が悪いかわかって謝ってるの?」

(で、出た!!『私がなんで怒ってるのかわかる?』に並ぶ世界三大答えの難しい問題!)

正直、ライからすれば頭から尻まで聞いても何が悪いのか一切わからない。

というのも、女たちが伝えた内容は少女の好意云々は省いているからだ。最も肝心な部分が隠された問題を解けと言われても分かるわけがないだろう。

「:や、もう、ほんと勘弁してください」

「は?だから何が悪くて謝ってるの?って聞いてるんだけど?」

理不尽である。

「で、でも!確かに俺娼館行きましたけど、他の男連中だって普通に行ってるじゃないですか!なんで俺だけこんな責められてるんですか!」

「ぐっ…」

痛いところを突かれた女達。

極めて理不尽な怒りを向けていることは彼女たちにも自覚があるのだ。

だが、さすがにもはや冷めている少女の恋心を伝えてしまうのは不味い。

結果として、無意味な膠着が続いてしまっている。

だが、この膠着を吹き飛ばす妖精が現れる。

「あ………」

気付いたのは、門を挟んで通り側を見ている女達が先だった。

自分の後ろを見ていると気づいたライは振り返る。

「……団長か」

歩いてきていたのは、我らがディオニユロス・ファミリアの団長の
フィルヴィス・シヤリアだった。

俺たちに気付いたフィルヴィスは少し驚いたように立ち止まった
が、すぐに先ほどよりも速い速度で歩き出した。

だが門は俺を入れないために閉まっているので、立ち止まらざるを
得なかった。

「……何をしているんだ？」

不愛想に問いかけるフィルヴィスに、俺を締め出していた女達は戸
惑いながらも答える。

「……ただ、雑談してただけ……です。だ、だよね？みんな」

「うん」「そうです」と続く女達を怪訝そうに見渡す。

だが、不躰に見られるのに不快感を覚えたのか、一人が「な、なん
ですか？」と聞いた。

「門を通りたいんだが、開けてくれないか」

そう言われて、女達は謝りながら即座に門を開けた。

「……………」

開けてもらったフィルヴィスだが、お礼どころか一瞥もすることも
なく女達を通り過ぎて本拠へと入って行ってしまった。

(空気悪っ！)

分かっていたことだが、団長様は相変わらず腫れ物扱いされてい
る。

幸いなのは、あまりにも可哀そうすぎてあれだけ邪見な態度を取っ
ても虐めとかに発展しないということだろう。

妙な気まずい静寂が続いたが、俺が「通って、いい？よな？」と聞くと「う、うん」と答えてくれたので、この気まずい空間を抜け出して無事本拠に帰還を果たしたのだった。

三話 デイオニユソス・ファミリア

(なあにやってんだ俺はあああああ
!!!!!!)

明くる日の朝。

俺渾身の心の叫びである。

色々、まあ、流れとかあるし。やっちゃまったもんはしょうがない。
昨日のことは切り替えていこう！

(……とか、そんなんでもいいんだよ!!!!!!
ふざけんじやねえよ俺!!!よりにもよって……)

デイオニユソス・ファミリアってなんだよおおおお!!!!!!

さて。

無事前世の記憶を取り戻した俺であったが、昨日は一旦脇に除けた問題を直視するべき時が来たのだ。

(デイオニユソスはヤバイ。何がって、もうとにかくヤバイ)

あまりにもヤバすぎて語彙力の低下が起きた。

正直、オラリオにある数あるファミリアの中でも、屈指のハズレだ。
もしワーストランキングをつけるなら

一位 イウイルス 闇派閥全部

二位 フレイヤ

三位 デイオニユソス

ぐらいには入ってくる。

え? フレイヤの方が嫌なのかって?

そりやそうだろう。死ぬ直前まで戦わされるなんて最悪だし、自由とか無さそうだし。

てかフレイヤ・ファミリアの利点なんてフレイヤとお近づきになれ

る以外には無いだろう。入りたいってやつはただのフレイヤの狂信者なんで関わらないでください。(偏見)

まあとにかく、後の展開をある程度知っている者としてディオニユソスはハズレもハズレと言わざるを得ない。

(いや、待てよ?)

しかし、よく考えて見れば、そこまで悪くないように思えてきた。というのも、最後の方は確かにガチで最悪ではあるが、それまで：それこそ原作開始からそこそこ進むまでは特に問題ない。

それに、別に改^{コンバージョン}宗を止めているわけではないだろうし、ヤバくなる前に改宗してしまえばいいのだ。

理想を言えば、原作開始までに改^{コンバージョン}宗して、安全に行きたいところだ。

そう、長期的に見れば不味いが、短期的に見れば悪くない。

むしろ下手に50階層あたりの超危険階層に行ったりするようなロキと比べても優良な方……なわけねえよ。さすがに美少女達と関わるこのの方が約束された破滅より良いに決まっている。

ってなわけで、一瞬は絶望した俺だったが、まあ意外と何とかかなりそうなることがわかって一安心である。

(にしても……ディオニユソス・ファミリアねえ……)

思い起こされるのは、昨日の出来事だ。

突如現れた我らが団長、フィルヴィスによって俺たちの間にあった空気はヒエツヒエになってしまった。

だがああいった空気になったのには、どちらにも要因がある。だが大元の原因にはフィルヴィスの過去の出来事が関係している。

かつては別にそこまで人を邪見に扱ったりするような性格ではな

かった。エルフらしい、ちよつと潔癖な女の子だったのだが、それが変わってしまったのは『27階層の悪夢』が起こってからだった。

『27階層の悪夢』。今から、4年ほど前になるだろうか。

未だ闇派閥イザイルスの活動が活発だった時期の話だ。

ダンジョンの27階層で闇派閥の連中による、階層主をも巻き込んだ超大規模な怪物進呈パス・パレードが冒険者に対して行われたという事件だ。

この時は闇派閥の幹部の目撃情報があったために、多くの有力な冒険者が27階層に向かっていた。そのため冒険者への被害はとてつもなく大きく、後に救援に駆け付けた冒険者が言うには、広間ルームから、その道まですべてが死体と、死体を貪る怪物モンスターに埋め尽くされていたのだとか。

しかし、これだけ凄惨な事件でありながらも、生存者がたった一人だけ存在した。

その唯一の生き残りこそが、フィルヴィス・シャリアだった。

この世の地獄を見たかのような凄惨な光景だったためか、リヴィラまでたどり着いた彼女はもはや死人のようだったという。

だが、悲劇はこれだけでは終わらない。

こんな事件があつたとしても、彼女は冒険者であつた。倒れた冒険者に報いるためか、迷宮へ潜ることをやめはしなかったのだ。

当然の話だが、ダンジョンに一人で潜るなんてことは自殺行為であるため、必然誰かしらとパーティを組むことになる。

そして、彼女の悲劇はまさにそこだった。

まるで呪われたかのように、彼女とパーティを組んだ者は全滅した。そう、組んだ者すべてだ。

しかし、彼女自身はなぜか死なずに生き残る。

この事実が冒険者達に広まるまでそう時間はかからなかった。

そして、彼女は冒険者達にこう呼ばれるに至った。

“死妖精”と。

つてのが、フィルヴィス・シヤリアの大まかな来歴である。

曇らせ製造機と名高いダンまち世界においても有数の過去を持つ屈指の曇らせヒロインだ。

こんな感じのことがあったので、彼女はあんな風に人に関わらず、関わらせないようになっているというわけだ。

なので根は優しい。悪いやつとか、嫌なやつという訳ではないのだ。

それ自体は知っているが故に、ファミリアからは敬遠されながらも虐められたりといった事態には発展していない。

強いて言えば副団長のアウラさんが目に見えて嫌っているような感じなぐらいだ。

あ、俺？俺はアレよ、別に普通よ。

今となつては色々知ってるから、『ネームドキャラだ！』って感動以外にはほぼない。

元々これまでの俺は、気に掛けながらも特に話しかけたりはしない…といった感じだったので、これまでと関わり方に変化はない。

キャラとしては普通に好きなので、原作通りの活躍をしてほしいところだ。

次に、俺のことだ。

俺、ライ・レインバックは、Lv4という都市有数の冒険者である。原作を知る人からすれば『たかだかLv4』と思うかもしれないが、リユースさんも同じLvだし、Lv5以上のキャラは超大派閥の幹部数

人だけだ。

ネームドのキャラは大体Lvが高いが、それよりも遥かに多いモブキャラのほとんどはLv1だ。実際都市の冒険者の半数以上はLv1だし、Lv2は全体の3〜4割を占めている。そのわずかな残りこそがLv3以上の上澄みというわけだ。それを鑑みれば、中堅派閥でありながらLv4というのは破格の強さを誇る。

だが正直、ダンジョンのヤバさをこの身と原作知識で実感している俺としては、Lv4では全くもって安心できない。出来ることならとつとLv6あたりになつて、一人で安心して深層を闊歩できる程度の強さを手に入れたところだ。

…ちなみに、俺の二つ名は銀髪からとつて「シルヴァリエ銀騎士」。…まあ、普通にかっこいいからまだマシな方だ。ダークインフェルノ…だの、ファイヤーフレイム…だのといった中2みたいな名に比べればいくらかマシだ。欲を言えば「静寂」とか「猛者」みたいな、ルビを使わないやつの方が良かったが、そう高くは望むまい。

(……ダメだ。腹減った)

一応許してくれたつぽいんだが、さすがに女性陣と顔を合わせずらいので時間をずらすべく考え事をして時間を潰していたんだが、もう腹が減りすぎてしんどくなってきた。結構ずらしたから女性陣は食堂にはいないはず。

食堂に行くと、思った通り女性陣は朝食を食べ終えたようでもう出ていったようだった。
が。

「おや？おはよう、ライ」

我らが主神、デイオニユソス様がいた。

デイオニユソス。

神の例に埋もれず、人間離れした容姿を持つている。タイプでいえば、甘いマスクの貴公子……といったところだろう。

清廉な印象に惹かれてか、女性陣は堅めな性格が多くなっている。もちろん見た目だけでなく、性格も善神として有名であり、特にコレといつて悪いところは無い。

彼の司る葡萄酒にかけては酒の神であるソーマをして『俺よりも極まっている』と言わしめるほどだ。

今の俺としてはちよつとこう……思うところが無いでもない。

とはいえ、そんなふうにいることを知られるわけにもいかなないので、いつも通りに。

「おはようございます。デイオニユソス様」

「昨日は大変だったみたいだね」

「いやあ、もうほんとに大変でした。俺悪くないですよね？」

「うーん」

一応自身の眷属のことであるため、当然少女の恋心も知っているわけだから、女性陣の気持ちもわからないでもない……といった感じである。

「え、まさかデイオニユソス様、女性陣の味方ですか？」

「いやいや。まあ、あの子たちにも色々あるんだよ」

「ええ……」

（正直、誠に遺憾であります）

「あ、てか、デイオニユソス様も知ってるんですね。俺が歓楽街に行つたこと」

「うん。サムたちがあれだけ大声で言いふらしていたからね」

「あいつら……後で絶対殴る」

「…あれから女性陣にゴミのような目で見られてるし、それで許してあげなさい」

「あ、それであいつら昨日からずっと居ないんですね」

「うん。さすがに針の筵状態だと本拠にも居ずらいからね」

いい気味だ。あいつらのおかげで俺は訳も分からず女性陣に嫌われているのだし。

「で、件の女性陣は…？」

「あの子たちなら朝早くに揃って出かけて行ったよ」

「え。じゃあ俺の朝飯は…」

『無し』だそうだよ」

「ええ…陰湿…」

衝撃の事実である。

何せ、ウチでは基本的に女性陣が料理当番を交代して回している。というのも、ウチの男どもは俺含めて揃って料理がダメダメなのである。下手に食材を無駄にさせるぐらいなら、最初から私らが作った方がマシ！とのこと。ぐうの音も出ません。

しかし前世の記憶を取り戻した今の俺は違う。前世では極稀に、Twitterで気になった料理を作ったりしたものだ。だから俺は料理が出来るようになった…:…:と思っただが、この世界にCOOKPAD先生もGoogle先生もいないのだった。やっぱりダメじゃん。

そういえば、なぜこんな仕打ちを受けても全然応えていないのか疑問な人もいるかもしれない。

その理由は、こういったことは別に珍しくはないから、だ。

ウチのファミリアは女性が高ほとんどである。まあこれはデイオニソスの女性人気が高いことが原因なのだが、そのせいかわファミリア内では女性の方が立場が強い。

すると、ちよくちよくこんな風になることがある。

とはいえ、別に仲が悪いわけではない。向こうも別に悪い人ではないし、俺らも別に人道に反したことはないから長期化するということもない。むしろこんな風に適度に言ってもらってガス抜きしても

らう方が、いきなり爆発するよりも全然良い。

こつちとしても料理だの家事だのを任せてしまっている負い目もあるし、多少は我慢しようという思いが強いのだ。

閑話休題。

女性陣みんなで仲睦まじいことこの上ないのは結構なのだ。

が、そんな女性陣の中でも殊更浮いた存在がいる。誰だろう。

「おはようございます。ディオニュソス様」

そう。我らが団長、フィルヴィス・シャリアさんだね！

「ああ、おはようフィルヴィス」

「おはよう、団長」

「……………」

(え、俺は?)

え、今、目あつたよね? 挨拶無しマですか? ……と言いたいところが、彼女はそんなもんだ。

それこそ、まともに会話をするのなんて崇拜しているディオニュソス様だけである。

「ははは、見ろフィルヴィス。ライが『え? 俺には挨拶無しですか!』って顔をしているぞ」

なぜ分かるディオニュソス!^{デウスデア}超越存在め! 「してないです。思っではいきましたけど」

見れば、フィルヴィスはしかめっ面で、『えええ…』みたいな顔をしている。

これはアレか? 挨拶とかしたくないけど、ディオニュソス様の言ったことだし挨拶した方が良い気がする…: 的なの?

ディオニュソス様の『そろそろ仲良い人とか作った方が楽しいぞ』的な気遣いは有難いんですけど…いや、やっぱり難くないんで勘弁

してください。

「いや、団長。ほんと、別に気にしないんで」
「……………」

(いや気まずい！オカンの知り合いに『ウチの娘可愛いでしょ？付き合ってみたら？』って言われた時かよ)

あれマジで気まずい。てかお節介過ぎるからマジでやめてほしい。

クソ気まずい沈黙が流れる食堂で、『なんでただ朝飯食いに来ただけなのに、朝飯食えない、その上気まずい団長と鉢合わせなきゃいけないんだよ』と内心で毒づく。

だが、その状況を打ち破ったのは、思いもよらぬ人間だった。

「邪魔するよ」

「「!?」」
「!!?!」」

突如響いた聞きなれない声に三者は驚いた。

予想外への行動が最も早かったのは、フィルヴィスだった。

「なぜお前がここにいる!!」

アンティアーネイラ
麗 傑!!」

四話 茶番。こんなファミリアは嫌だ。

「なぜお前がここにいる!!」

ファミリアネイラ
「麗 傑 “!!”」

突如現れたイシユタル・ファミリアの幹部に、フィルヴィスは即座に反応した。

ファミリアによる襲撃?それとも私怨?多くの疑問はあれど、フィルヴィスは即座に主神を守るべく臨戦態勢を整えた。

何故侵入を許した?見張りは……そう言えば今日は女性陣が揃って出掛けているのだったか。形式だけだろうがお誘いはあったので一応知ってはいる。

だがよりにもよってこんな時に来るとは……。

「全く。見張りもいないなんて、不用心にも程があるんじゃないのかい?」

「余計なお世話だ。それより、私の質問に答えてもらおうか」

「せっかちだねえ。あたしはソコの^{シルヴァリエ}銀騎士に用があるだけだよ」

「ライに……?悪いが、野蛮なアマゾネスと関わりのあるような団員ではない。即刻立ち去れ!」

……と、ここまでの状況を見て、察するところがあつた男二人。

(あ、そういえばフィルヴィス^コ、ボツチだった)

直近の騒ぎを知っていれば、ふんわりとはあるが状況の把握は容易いはずだ。だがしかし、誰ともコミュニケーションを取らず、騒ぎなどつゆ知らずのフィルヴィスにとってみれば、アイシヤの訪問は晴天の霹靂に他ならなかった。

「あ、あの、団長……?」

「ライ!早くディオニユス様を連れて離れろ!」

「え、や、あの……」

「早くしろ!!団長命令だ!!」

フィルヴィスの剣呑な雰囲気ヒリつき始めていたが、俺の様子を見て薄らではあるが事態を把握し始めたアイシヤ。

当然アイシャも「死妖精」の噂は知っているため、同じファミリアであろうと人との関わりが薄いことぐらいは想像がつく。

「……どうすんだいこれ」

まさにカオス。アイシャがぼやくのも無理はない。

「ディオニユス様、なんとかしてください」

もはや俺ではどうにもならぬと悟り、主神様に助けを求めた。

「……ああ」

少しの逡巡のあと、どこか悪どい笑みを浮かべながら俺に笑顔を向けた。

瞬間、俺は嫌な予感を感じた。

「フィルヴィス！」

「はっ！」

「ここはライに任せなさい」

「は？いや、しかし、私は団長です！守るべき団員を危険に晒すなど……」

「Lv3の君より、Lv4のライの方が強いんだから、彼に任せた方が良い……だろう？」

少し迷うが、純然たる事実としてLvが高い方が強いというのは納得せざるを得なかった。

「……はい」

「それで構わないね、ライ？」

「は、はい？」

（なんだこれ……何やってんだこの神……何の茶番だ？）

俺は全く主神の行動が理解出来ず固まる。しかしフィルヴィスは主神が決めたこととなれば、即座に行動を開始する。まさに眷属の鏡である。

主神をつれて食堂から出て行く二人。を、呆然と見送る俺とアイシャ。

だが、食堂の出口で立ち止まり、俺を見つめるフィルヴィス。

何事かと思つて見てみると、何やら口をパクパクとさせて言葉を探しているようだ。

「……お」

「お?」

「おはよう」

そう言うのと、顔を真っ赤にしながら出口を出て行った。

(え、今?)

いや、さっきのやり取りの所々にも優しい所とか溢れ出てただけど……今更挨拶して……。

まあ、『挨拶して欲しそうにしてた』↓『団員への激励に何と言えは良いか迷つた』↓『ハッ!? そう言えば挨拶して欲しいって言つてた』↓『おはよー!』は分かる……いや、わかんねえよ。もしかしてディオニユロス様がなんか口出したのか? いや、そうに違いない。

ほらみる。廊下の方からディオニユロス様の大爆笑とフィルヴィスのぷりぷり怒った声が聞こえてきた。

「……どんな茶番だよ」

どうやらディオニユロス様の壮大な茶番は、フィルヴィスの挨拶と照れ顔を引つ張り出すためだったらしい。あの愉快犯め……。

「なるほどね。良いファミリアじゃないか」

「何処がだよ……普通にディオニユロス様が説明すれば終わった話じゃねえか」

その後、俺とアイシャは本拠^{ホーム}を出て、街に繰り出した。

俺が朝飯を食べていないことを知ると、『じゃあ飯でも行くか』ってことになった。

で、このカフェで雑談に興じているというわけだ。

「ちゃんと団長に説明してくれてるかな。帰ってから『無事だったか!』』とか言われたらクソ気不味いんだけど」

「フフ……これから無事じゃなくなる可能性もあるんじゃないのかい?」

少し舌舐めずりをして、色っぽい雰囲気を出してくるアイシャ。

「……こんな真っ昼間から?」

「時間なんて関係あるのかい?」

「……無いね」

「だろう?」

「……もしかして、これが目的でウチまで来たの?」

「男恋しさに、家まで押し掛けてくるような女は嫌いかい?」

「まさか。それがアイシャなら尚更ね」

「…嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

「家まで押しかけて来た女を追い返すようなことを言う男よりは良いだろ?」

「違うない。それがライなら尚更さ」

……視線を交わし合う二人。

横で聞いていた一般人があまりの甘ったるさに吐き気を堪える中、まるで息を合わせたかのように突然立ち上がった二人は歓楽街の方へと消えていった。

次の日の朝。

「はあ、はあ…無事にすまなかったのは……あたしの、方だったみたいだね……」

「いや、俺も、もう流石に限界……」

二人は抱き合いながら眠りに落ちたのだった。

で、昼過ぎに起きて、夕方までして解散。
いつかのデジヤヴを感じざるを得ない。

そう。

「で？こんな時間まで一体何処をほつつき歩いていたのか説明してもらおうか」

怒髪天を突く。仁王立ちで俺を待ち受けていたのは、ブチギレた团长、フィルヴィスであった。

どうやら、無事では済まなくなるかもです。

「一応聞くんですけど、ディオニュソス様から説明は……」

「聞いた」

「ですよねすみません」

「で？」

「や、ホント、あの……凄く言いにくいんですけど、所謂“お茶”とか

“休憩”を……」

「は？」

「いやいや、こう、隠語的な。エルフってそういう直接的な表現とか苦手かなって……」

「それぐらいは知っている。ディオニュソス様と共謀して私を揶揄って楽しかったか？」

「うえ!?!知らん知らん!アレはディオニュソス様が勝手にやったことでしょ!?!」

「ディオニュソス様はお前の発案だと言っていたぞ？」

(あんの愉快犯がああああ!!!)

キラキラスマイルのディオニュソスの顔が目には浮かんだ。

「違います!アレはディオニュソス様が……」

「ディオニュソス様が、私に嘘をついたと？」

(あ、そう言えばコイツほぼ狂信者の域なんだった)

「いやいやいや、そうは言ってないんですけどね！こう、あるじゃないですか」

「何が？」

「粹な計らいといえますか、ただのお茶目な冗談だったといえますか……」

「冗談で『麗傑』をけしかけたのか？」

(ああもうダメだこりゃ)

もうこの狂信者には話を通じない事を遅れながらも実感した。

もはやジャパニーズ土下座をして許しを乞う以外には無いだろう。

「この度は、誠に申し訳ございませんでした。団長様に於かれましては、この私の土下座にて許して頂きますと幸いにございます」

「……なんだ？そのポーズは」

「極東における誠心誠意を示す最大の謝罪、土下座にございます」

「……………」

「あの……………」

「……………はあ」

仕方無い……とでも言いたげなため息を吐くフィルヴィス。

「…頼むから、ああいったことは二度としないでくれ」

「……………」

元より分かっていたつもりだったが、やはり相変わらず良い人だ。主神も守ろうとしていたし、何より俺も守ろうという意志が見えた。団長として、ファミリアを守ろうとしているのも伝わった。

ディオニユスは、伝えたかったのだろうか？彼女はファミリアを嫌っているわけでは無いということ。

いや、別にそれぐらい俺は知ってるから余計なお世話ではあるんだけどさ。

いや〜。『良いカミサマ』だよね！ホントに。なくんでこんなこ

としたのか知らねえけど。

「分かったか？」

「はい。二度としないです」

「神に……ディオニユロス様に誓えるか？」

「ええ。我が主神ディオニユロス様に誓って」

そう言うのと、フィルヴィスは俺の答えに満足した様子で戻って行った。

いやあ……。

俺もね？ フィルヴィスに申し訳ないって気持ちは結構あるからね？ そりやもうああいう茶番には付き合わないようにするんだけどね？

それを誓うのが……あの神つてのがね？

こう……ねえ？ アレに誓って一体何になるのかって感じがするよね。

出来ることならヘステイアとか、ヘファイストス辺りの善神に誓いたいところだった。

(ああー。やべ。めちやくちや改^{コンバージョン}宗したくなつて来た！)

早く将来が不安になるようなこんなファミリアから抜けて、安心して過ごせるファミリアに入りたい……。

……となれば！

「ダンジョンしかあるまいてー！」

「そうだ！」 「俺たちの居場所は……」 「ダンジョンだ！」

「行くぞお前ら！」

「「うおおおおお!!」「」」

そう。やはりダンジョン！ ダンジョンしかない！

ランクアップすれば、俺はレベル5！そうなればディオニユソス・ファミリアで抱え込むには大きすぎる戦力になる。となれば、ヘッドハンティング…大派閥からのお誘いもある…：…かもしれない！

「ランクアップするぞオラアあああ!!」

「うおおおお!!」

雄叫びを上げながら中層を突き進む、ディオニユソス・ファミリアの男四人集。

…：…なお実の所、男性陣（俺含め）は先日の騒動以降ファミリアに居づらくなつたので、リヴィラに一時避難しようとしているだけである。

雄々しい雄叫びに反して、彼らの目には涙があつたのだとか、無かつたのだとか。それはまるで、反抗期の娘と妻に邪険に扱われ、居酒屋で愚痴る父親のようだったという。

（俺はいつか絶対!!こんなファミリア辞めてやるからなああああ!!!）

五話 リヴィラにて誓う

ダンジョン17階層。

一体どこまで続くのか不明なダンジョンにおいては、13〜24階層は中層と区分される。

上層とは比べ物にならない過酷さから最初の死線とも呼ばれており、適正がLv2へと跳ね上がる。

原作でベル一行は、Lv2のベル以外のヴェルフとリリがLv1という僅か三人の編成で18階層まで到達している。が、これは無謀と言わざるを得ない。

実際に自分が潜っているからこそわかるが、あんなのは自殺行為と言わざるを得ない。というか、あの状況になった時点で普通は詰みだ。

実際死に体でギリギリでたどり着いたわけだが、一歩間違えれば死んでいただろう。アニメでもなかなか絶望的な状況を表現できていたが、誰も死んでいない辺りベルのチート具合が伺える。

それでも、深層に比べればまだマシな状況だったともいえるのがベルのおかしい所だ。…いや、ホントに何であれで死なないんだよ。

とにかく、いきなりそんな感じでダンジョンっぽくなる中層ではあるが、今の俺にとってみれば上層とそう変わりはない。

なにせ俺のLvは4。中層ぐらいならステータスでのゴリ押しが十分可能だ。パーティの3人もLv2だし、中々のベテランのため油断とは無縁の存在である。

僅か5時間という時間で、俺たちは18階層の安全階層を目前にしていた。

「……なんか、音聞こえないか？」

「音〜」

Lvが上がるごとに鋭敏になる感覚器官が、異変を察知した。

「地響きと…雄叫び…かな？」

とにかく、普段のダンジョンでは経験がない異常事態であることは明確だ。

深層への遠征を経験した俺たちに慢心はない。

「どうする？」

「普通に考えれば蜻蛉帰りが安定ではあるが…」

「俺たちが出てきた意味を考えるとなあ」

「「それな」」

そう、俺たちは本拠ホームに居づらくなって出てきたのだ。

ここで蜻蛉帰り返れば針の筵に逆戻りとなる。

が、命よりも大事なものは無いというのも当然のこと。

「どうするよ、リーダー」

「言われてるぞリーダー」

誰の事言ってるのか知らねえけど任せたぞリーダー。

「いやお前のことだよLv4」

「え、いつの間に俺がリーダーになったんですか先輩」

「こういう時だけ敬語使ってるじゃねえよ」

「うええ…マジかよ」

うーん…。

正直、この階層なら俺は死なないだろう。単純にLvが高いし、切り札もある。

だが、この3人はLv2。信頼はもちろんあるが、Lv27階層の悪夢〴〵ばりの状況になったとしたら守り切れるとは思えない。

でもなあ……。

「なくんか大丈夫なやつのがするんだよなあ」

17階層、嘆きの大壁。

18階層につながる連絡路があるそこには、極大の障害がある。

「ゴライアス」。

迷宮の孤王と呼ばれる中層の階層主だ。

迷宮内に1体しか存在できず、一度倒すと復活までに2週間ほどのインターバルがあることが孤王と呼ばれる所以だ。

ギルドの推定ではLv4。

ただ正直このLv7ってあてになるの？って感じた。別にLv4なら単独で倒せるってわけでもないしなあ。いや、確かにリユーさんなら倒せる気もするが、アレはLv4の最上位だから当てにならない。ともかく、中層で出現していいような怪物モンスターではないことは確かだ。その強さは、要約すれば『アカい』『強い』『パワー！』『ヤー!!』だ。7Mメドルの巨体と、それに見合うパワーと耐久。特殊な攻撃は精々ハウル咆哮ぐらいのものだが、力と耐久のゴリ押しは充分に脅威だ。

しかし、普通の冒険者がゴライアスに遭遇することはあまりない。ロキ・ファミアリアやフレイヤ・ファミアリアが通る際に雑草感覚で刈り取られ。あるいは、18階層にある「リヴィラ」の冒険者総出で『邪魔じゃボケえー』と倒されるからだ。

「お、良い所に来たな『銀騎士』！」

「ボールスさんか。なるほどね、こういうことだったのか」

リヴィラの元締めであるボールスが、俺たちに気付いて声をかけてきた。

そう。俺が聞いたあの音は、ゴライアスとリヴィラの冒険者による

戦闘音だったようだ。

丁度その討伐のタイミングで出くわしたということだろう。

「後は頼んだぜLv4！援護は俺たちに任せろ！」

そう言うのと、こちらの返事も聞かずに陣形を組み換えるために指示を飛ばし始めた。

「…いや、別にいいんだけどさ」

そりゃ、こうなつちまったらやるんだけど。人任せつてのはなんか納得いかねえ。

確かにゴライアスは脅威だ。

リヴィラの冒険者は定期的に討伐しているため慣れてはいるだろうが、当然死傷者は出る。まともに食らえばLv4でも死にかねない攻撃を相手にしているのだから、当然と言えば当然。

ボールスとしても、元締めとして身内の死人が出るのを嫌っているのはわかる。

「でもさ…こう…言い方とか頼み方とかあるじゃんか…ねえ？」

「…良いから早く行けよLv4」

「…へいへい」

誰も味方は無しですか。そうですか。

てか、こいつら、絶大な信頼寄せすぎでしょ……。本気で援護全振りにしようとしてない？

(まあ、変に怪我とかされるよりはマシか)

どうやら冒険者たちの配置換えも完了したみたいだし、そろそろ行くとしますか。

剣を抜いて唱える。

『『不^{シルヴァ}落要塞』』

「〃銀騎士〃の活躍に…カンパ…ー…ーイ!!!」

「〃うおおおおおおお!!!」

その日の夕方。

俺たちは討伐に関わった冒険者みんなとリヴィラの酒場で祝勝会をしていた。

「今日は死者0…これも〃銀騎士〃のおかげだな!!」

そう、今日は死者0。

毎度死傷者0とは中々いかないゴライアス討伐だが、俺のおかげでそれが少しでも減ったなら喜ばしいことだ。

だがもちろん、それはここみんなの協力があってこそだ。

「いえいえ、俺なんてホント、若輩者で。勝てたのは皆さんのおかげですよ」

「〃ひゅ〜!謙虚〜!」

「よくわかってるじゃねえか!今日勝ったのはこの俺様の指揮のおかげだ。なあ?」

「〃……………」

ボールスが自信満々に入ってきたが、誰一人として反応を返さない。

あれ?と思うのもつかの間、俺は机にダン!と足をのせて立ち上がる。

「バカ言ってるじゃねえよボールスこのやろお!」

「えっ」

突然のため口!基本的に丁寧な物腰のライの暴言に、ボールスは騒然とする。

「今日はこの俺!銀騎士、ライ・レインバック様のおかげにに決まってるらうがあああああ!!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

「銀騎士!銀騎士!」と銀騎士コールが鳴り響く中、一気飲みで場を盛り上げていく。

「なあ、あいつ、ついさつきまで謙遜してたよな」「しかも呂律もちよつと怪しい」「あいつ飲みすぎじゃあ、あ、倒れた」

つい先日の出来事もあって、少しお酒を自制しているディオニユロス・ファミアアの男三人。

倒れたライに大爆笑している冒険者達を尻目に、えっほえっほと宿泊地まで運び出していく。

「あ、やべ。クツソ気持ち悪おええ」

「おいバカやめろきたねえな」

翌朝。

俺は原因不明()の吐き気にグロッキー状態だった。

一体ぜんたい、なんでなんだろう。さては毒!?おのれディオニユロス!!

「あゝ死ぬゝ…」

「ゴイツがこのざまだと探索なんてできないし、今日はリヴィラでゆつくりするぞ。明日はちよつと下に行つて、もう一泊して帰るって感じで」

「了解」

「りよゝかゝ…：…うぷ」

全く。自由行動とは羨ましいものだ。

流石に地上ほどではないが、このリヴィラでは、少なくとも冒険者が欲しいと思うようなモノは大体揃う。まあ店を出しているのも冒険者だから、需要を把握しているところはあるだろう。

ただし、やたらと高い。普通にぼったくりレベルで高い。

それでも買う人がいるのは、ダンジョン内で物資を補給することの困難さを表している。

ちなみにリヴィラとは何なのかを説明しておく、「ダンジョン内の街」というのがわかりやすい表現だろうか。

ここ18階層では、新たな怪物は生み出されない。このような場所あるいは階層を、安全階層セーフティポイントと呼んでおり、ダンジョンの所々で発見されている。

とはいえダンジョンはダンジョン。異常事態は起こるし、どこから怪物が侵入してくることもある。

そうして幾度となく壊滅した経験があるこのリヴィラだが、そのたびに作り直され、冒険者の街が出来上がる。

まあ、それだけの手間をかけてでも充分利益と需要が見込めるといふことだ。

出来る限りここで物資を買ったりはしない方がいいのだが、どうしようもない時もある。

そう、例えば二日酔いでグロッキーな俺のように。

「あゝ…死ぬゝ…」

「ほら、薬買ってきてやったから飲めよ」

「ありがと〜」

「ったくよ。いくらしたと思ってるんだ」

「えー、500ヴァリスぐらい？」

「1万だよ！1万！」

（高っ！あと声でか！）

「ちよ、あの頭痛いんで〜」

「しるかボケ！」

「ひえ〜」

たかが1万ぽっちと思うかもしれないが、二日酔いの薬で1万だ。しかも1服用分。

これからある程度稼ぐつもりとはいえ、小さな出費でもない。

「大体てめえが倒れるほど飲まなきゃ薬ももう一泊も必要なかったんだよ〜」

「はい。おっしゃる通りです」

「大体ダンジョンの中で気緩めすぎなんだよ。お前もLv4なんだから、ファミリアの要としての自覚をだなあ」

「はい。すみません。もうお酒やめます、はい」

「言ったな？酒やめるって」

「はい」

いやもう、ほんと頭痛いんで説教はもう勘弁してください。

お酒はもう飲まないんで〜てかこんな苦しい思いをするぐらいなら酒をやめた方がマシだ。

「一生飲まないんだな？」

「いや、一生はちよつと話が違うじゃないですか！そんなの先輩だつて出来るわけないでしょうが！」

前言撤回。

酒をやめるなんて出来るわけねえだろふざけんな！

いやさすがにしばらくは自粛するけどさ。

「なら、いつまで」

「えつと…一か月とか?」

「あ?少しは反省とかないのか?」

「ひえっ!じよ、冗談じゃないですか」

まっずい。いつになくガチだこの先輩。

全部俺のせい of 自業自得とはいえ、さすがに何年間も酒を我慢出来る気がしない。

(なんかいい期間の目安…目標……………ハッ!)

天啓。

「Lv5に上がるまで、禁酒します!!」ドン! (ワンプイ感)

六話 ダンジョンとテレパス

「ふつかああああつ!!」

烈海王ばりの復活を叫んだ俺、ライ・レインバック。

昨日一日寝込んでしまったが、ようやく完全復活を遂げた。

「ったくよ。今日は頼むぞ」

「マジ任せろ」

いや、ほんとに。

ゴライアス討伐の報酬は多めにもらったがそれでも無駄遣いには
違いない。

さすがに笑えないレベルの迷惑をかけたので、マジのガチで頑張
る。

Lv4の力、見せちゃりますよ！

ダンジョン24階層。

ここまでが18階層より続く大樹の迷宮だが、この次の25階層か
らは大きく環境が変化する。

25階層以下は分類としては下層になり、危険度も跳ね上がる。

それこそ、例えLv4だろうと一人では死ぬレベルだ。

今回、俺たちはたった4人のパーティ。

下層を潜るには余りにも危険過ぎるため、ここまでが限界だ。

ここ24階層もLv2だけで潜るには危険なのだが、Lv4の俺が
いれば探索は可能だ。もちろん、無理をすれば普通に死ぬから充分に
警戒する必要がある。

「右からテッドリー・ホーネット!!」

「は!?!またかよ!?!」

「数は7:12:17!!」

「17!?それは流石にキツイ!」

「数をけずりながら下がるぞ!」

デッドリーホーネットは、22階層から24階層に出現する蜂型モンスターだ。『上級殺し』とも言われ、その恐ろしさは「数」。

全方向を取り囲まれれば全滅もあり得る恐ろしいモンスターだ。

そのため、囲まれないように位置どりながら数を減らすしかない。また、耐久はそこまで高くないため、魔法などの広範囲攻撃で殲滅するのが常套手段となっている。

17という数はそこまで多くはないが、逆に言えばこれだけしかないという事はあり得ない。17匹を相手にしているうちに30、40と増えていくのが相場だ。

「これだけの数なら…近くにブラッディハイヴがあるのかもしれないな」

ブラッディハイヴとは、簡単に言えばデッドリーホーネットの巣のような設置型のモンスターだ。

希少種のモンスターではあるが、近づけば近づくほどデッドリーホーネットが増え続けるため、討伐は非常に困難となっている。

「ありえるな。さつきから続けて50匹ぐらいは倒した気がする」

「今回は絶対無理だ。大人しく離れよう」

「りよ……かい!」

下がる味方を殿で援護しながら着いて行く。

先輩達は流石ベテランだけあって、引き際の判断も早い。

デッドリーホーネットとの戦いは間違いなく長引くし、長引けば長引くほど他のモンスターの数も増えていく。だからなりふり構わず撤退が正解だ。

ただ立て続けの戦闘のせいで、一応金を稼ぎに来たのにろくにアイテムも魔石も拾えないのは悔しいものだ。これが中層以下の嫌なところでもある。そもそも敵が強いから魔石を避けて倒す余裕なんて無いし、魔石を残して倒せても次のモンスターが出てくるせいで魔石を拾う余裕が無い。

上層では魔石なんていくら拾ってもあんまり金にならないのに、いざ中層来ると拾う余裕すら無いのだから悲しい話だ。

「ふう〜」

最後まで追って来たデッドリーホーネットを切り捨てて、ようやく一息がつけた。結局追って来たのは23体。あのまま留まっていればこの数では済まなかっただろう。

「なんとか凌いだか」

「いやーキツかった。流石にあの数の上級殺しは運が悪いとしか言えないだろ」

「それな」

「みんな怪我とかは無いな？」

「いや、全員無事だ」

「よし」

「また目的地遠くなったんじゃねえか？」

「……いや、なんだかんだで後少しだ」

そう、俺たちは目的があって中層の一番下に来たのだ。

その目的地は宝石樹。

その名の通り、宝石を宿す木のこと、非常に希少価値の高いアイテムを手に入れることができる。

ただ、そう簡単にたどりつける場所ではない。

中層自体の難易度も当然としてもう一つ。宝材トレジャーキーパーの番人の存在だ。

ダンジョン内のこうした貴重な素材やお宝のもとには番人が存在し、冒険者の行く手を阻む。

ここ24階層の宝石樹では、木グリーンドラゴン 竜竜がそれだ。

階層主を除いて中層最強のモンスターであり、実質的にはちよこつと弱めの階層主のようなものと思ってもらえればいい。

ゴライアスと同じくフィジカルモンスターで、巨体と耐久、パワーが武器だ。ただまあ、ゴライアスに比べればパワーも耐久も全然低い

ので全然弱い方だが、それでもLv2のみのパーティでは勝つことは難しいだろう。

ちなみに、外伝で出てきた強竜カドモスも同じく番人だ。コイツに至っては力だけならゴライアス以上とも言われているらしいし、正直戦いたくはない。

そんなわけで、みんなある程度物資や精神力マインドを温存しながら宝石樹を目指しているというわけだ。

温存の必要が無いのなら、さっきのも魔法で焼き払ってもらうことも可能だったが、木竜を相手にするならそうもいかなかった。

「んじゃ、とつとと行きますか。また戦闘するのはゴメンだしな」
「了解」

あれから4度ほどの戦闘を経て、俺たちは宝石樹へと辿り着いた。まあなぜか木竜が居ない：なんてこともなく、戦闘は避けられない。

「シルヴァーグロウ」
『不落要塞』!!
『グオオオオオ!!』

首を鞭のようにしならせての頭でたたきつけてくる。

まともに当たれば死んでもおかしくない攻撃だが、俺からすればよける必要もない。むしろ攻撃としては『アタリ』の部類だ。

凄まじい音が響き、たたきつけをまともに食らったはずのライ。しかしパーティメンバーに動揺はかけらも見られない。

それもそうだった。なぜならライは吹き飛ぶどころかまるで何事もなかったかのように立っているのだから。

「効かねえんだよー」

そのまま顎に剣を突き刺しそのまま切り裂いていく。

頭部を傷つけられ苦しむ木竜も、当然そのままではいるはずもない。暴れ回り、ライを潰さんとしてくる。

が、一切の痛痒も与えられない。

どころか攻撃した部位から斬りつけられ、いたずらに傷を増やすばかり。

なぜか。

それはライの魔法『不落要塞』シルヴァークローリーによるものだ。

その効果は単純。

『3分間の物理完全無効化』だ。

魔法、属性、呪い、カース付与エンチャントされた攻撃などを除き、物理的な攻撃を完全に無効化する。

視覚効果としては光の鎧を纏っているように見え、時間がたつにつれて薄くなっていく。

この効果によって、魔法的な攻撃を持たないゴライアス、木竜などを理論上は完封できるといわけである。

一見チート魔法ではあるが、当然それに見合う弱みも存在する。

その最たるものが、圧倒的な燃費の悪さだ。

まず、Lv4のステイタスでも3回しか打てない。つまり最大でも僅か9分間しか持続しないということだ。

これはダンジョン内においては致命的である。何時間も探索や戦闘を行うダンジョンでは3分×3回では到底足りるはずもなく、使いどころは非常に限られる。

しかも一度使えば、『途中で解除してその時間分の精神力を温存しよう！』なんてこともできない。たった一度の攻撃を防ぐために使っても、3分間は強制的に発動してしまうというわけだ。

物理攻撃完全無効ならば、ゴライアスもソロ討伐出来るんじゃないかと思いかもしれないが、そう簡単にはいかない。

あれだけの巨体と耐久を削るには9分では全く足りないのだ。そ

れこそ、先日のゴライアス戦のように周りの援護があつてようやく削り切ることができるといふ。

しかし、一応何とか一人で倒す手段も無いこともない。ただ必要なだけのアビリティ：特に魔力があれば、ゴライアスの討伐も夢ではない……はずだ。

閑話休題。

今の現状。つまり3分間とはいえ実質無敵状態で、一方的に攻撃しつつヘイトも稼げる前衛のLv4と、Lv2中後衛3人という状態であれば問題なく勝てるというわけだ。

「……っし。ちようど3分つてとこか」
『不落要塞』の効果を示す光の鎧が消えるのと同時、木竜も灰になった。

木竜が中後衛を狙い始めるようなことがあればもつと時間がかかったろうし、木竜のサイズまで考えると、3分クッキングは上々といえる。

「相変わらずデタラメな魔法だな」

「自分でもそう思うよ」

「最初の頃はめちやくちやビビりながら攻撃受けてたのにな」

いや、そらそうよ。

物理攻撃完全無効化つて言われても、最初は仕様とか分からないから「コレ大丈夫だよな!? ホントに大丈夫だよな!? いっ…たくねえ!! スゲエコレ!」ってビビりながら確かめていくのは当然だった。

最初は時間管理もガバガバだったが、体に3分を覚え込ませた。

おかげで今では誰よりも正確にカップヌードルを作れる自信がある。

「さて。んじゃあ、お待ちかねの…」

「本命の宝石樹、頂いて帰るとしよう」

「二「かんぱーい!!」」

「……乾杯」

18階層に帰ってきた俺たちは、今回の成果を祝っていた。

中層のモンスターの魔石も結構取れたし、ドロップ素材やレアアイテムもいくつかがゲットできた。

僅か4人だけであることを考えれば、山分けにしてもかなりの金額を稼ぐことができたというわけだ。

正直、お金のことだけを考えるなら今日中に地上に戻って本拠^{ホーム}に戻った方が良いに決まっているんだが、さすがに疲労もあるため、一泊してから帰ろうとなったわけだ。あと、酒場まで来て祝ってるのは財布の紐がゆるつゆるに緩んでいるというのものもある。

無駄使いは…というのももつともな意見だが、冒険者なんていつ死ぬかわからない職業なんだから宵越しの金は持たない方が良い、という考えの人は多い。今回に限っては俺のせいでの出費もあるし迷惑もかけたから文句も無いし、むしろ借りを返しているぐらいの気持ちだ。

ただ……。

「いいなあ。楽しそうで……」

まさかつい昨日禁酒宣言をしたところなのに、昨日の今日で宴会になるとは思わなかった。

もちろん酒を飲まなくてもそれなりに楽しいのだが、酒を飲んで楽しむことを覚えてしまった俺はひどく物足りなさを感じてしまう。

「ライは飲んだらダメだぞお？」

「言われなくてもわかってるよ」

「いつまでだっけ？」

「Lv5になるまで」

「おお、大きくでたな」

全くだ。Lv5というのは現在のかの「剣姫」アイズ・ヴァレンシュタインに並ぶということを指す。

オラリオのトップクラスに並び立とうというのだから、本当に大口を叩いたものだ。

誰に聞いても、数年単位ではほぼ不可能だと答えるだろう。Lv5というのはそれだけの偉業であり、第一級冒険者というのは高みの存在なのだ。

しかし、俺はこれを数年以内に達成可能なことだと確信している。手段としては『ゴライアスの単独撃破』だ。アイズが外伝で深層の階層主ウダイオスを倒してレベルアップを果たしたように、階層主の撃破というのは偉業として数えられる。

そしてこれは、俺にとつてはそう難しくない。圧倒的に有利な魔法を持っていくわけだし、ステータスが足りるようになれば単独の撃破は容易だと見ている。

全然数年：それこそ1、2年の間に行ける可能性すらあるはずだ。細かい季節とか日には覚えていないから断言はできないが、ベルがオラリオに来て原作が開始するのがおそらく2年後とかのはずだから、上手くいけばそこまでにLv5に上がれるという目算である。

(ま、最悪原作イベに介入して「偉業」でも成し遂げれば上がるっしょ)

それこそ、黒いゴライアスとかに介入すればさすがに上がるだろう。

そんな甘い考えを決してダンジョンは、神々は許さないということを知るのは随分と後の話になる。

「はあ〜〜〜……」

ズルズルと、男3人を担ぎながら宿へと帰る俺。

酒が無いとそれほど気分も上がらなかつたし、俺の代わりとばかりにこいつらは酔い潰れるしで、先日と状況が完全に逆転した。

上がらぬ気分を少しでも上げようと上を見上げれば、結晶が月のように美しい明りを放っており、実に幻想的な風景だ。

18階層には「アンダーリゾート迷宮の楽園」という呼び名もあり、その所以は天井にある大結晶群によって生み出される幻想的な光だ。

地上の時間と連動して、昼間は明るい光を放ち、夜は星空のような輝きを放つため、時間の指標にもなっている。

(アイシヤに会いてえなあ…)

美しい景色を見て考えるのは、アイシヤのことだった。

願わくば、アイシヤも同じように地上の星空を眺めてはいないだろうか。

「…!!」

「あ、アイシヤ? どういたの? いきなり空なんて見上げて」

「今、ライが呼んだ気がした」

「ええ…」とドン引きするのはアイシヤの同僚、レナだった。

先日からライとの逢瀬でファミリアの業務から外れていた影響で、アイシヤの仕事はレナに元に回ってきた。

当然、また抜けられればレナの仕事は増える。のにこの女とくれば、また訳の分からないことを言い出した。

「ちよつとアイシヤ? 今日はダメだからね?ほんとに、今日こそはダ

メだからね!？」

さすがに普段から世話になつていゝ姉貴分とはいへ、また仕事を増やすのは勘弁して欲しいという思いでいっぱいだった。

しかし、当の本人はレナの声が聞こえていないかのようである。

アイシヤはオラリオ隅から隅まで見回したかと思えば鼻を鳴らし、匂いを嗅ぎだした。

訳の分からない奇行に、レナはさらにドン引きした。

アイシヤはしばらくそうした後、突然バベルの方へと振り向いたかと思えば、ジツとその根元のダンジョンを睨みつけた。

「あ、アイシヤ? さつきから何してるの?」

「なるほどね、ライはダンジョンか。おそらくは中層……この時間なら18階層つてどこか」

「えっ?」

「なるほどね。おんなじように、美しい夜空を見上げようってハラかい。随分とロマンチストだねえ……でも、悪くはない、か」

そういつたアイシヤは、ベランダに腰かけ、夜空を見上げ始めてしまった。

それはさながら、星に願いよ届けと祈る少女のようであった。

「え……ええ………」

徹頭徹尾理解できないレナは、戸惑つたまま呆然としていたのだつた。

七話 主神と、n回目の逢瀬

ディオニュソス・ファミアの本拠^{ホーム}、神室。

中層から無事帰還した俺は、ステイタス更新を受けるべく、ディオニュソスの部屋を訪れていた。

そもそもファミアとは、主神である神と、その眷属のことを指す。主神が自身の血^{イコル}“神血”を下界の人間^{こども}の背に垂らすことで、その人間はその神の眷属となり、神の恩恵“ステイタス”が刻まれる。

ステイタスを刻まれた人間はLv1となり、恩恵を持たない人間よりも高い能力を持つことになり、モンスターを倒す・鍛錬を積むなどによって経験値^{エクセリア}が溜まるようになる。そして溜まった経験値は力・耐久・器用・敏捷・魔力の5つのパラメータの数値に反映される。あるいは、スキルや魔法の発現という形で現れる。

そして、神々ですら認める偉業を成し遂げた者には器の昇華“ランクアップ”が起こる。

そうして、はるか昔より下界の人間と神の関係は続いていた。

神血^{イコル}を垂らすと、俺の背中に神聖文字^{ヒエログリフ}で書かれた文字が光を放つ。

そして更新を終えた神は、俺たちでも読めるように、羊皮紙に共通語^{コイネー}で写す。

「はい。これが今回のステイタスだよ」

そう言ったディオニュソスからステイタスを写した紙をもらう。

(ふんふん……お、力と魔力の伸びはいいね)

ありがてえ。ゴライアス討伐においてこの二つは重要なステだからな。

ベルはバケモノみたいに合計で1,000以上上がったたりしていたが、あんなのは例外中の例外だ。普通は1度で上がるのは精々50と

か、ガチで死ぬレベルの無理を頑張っても100ぐらいのものだ。

でも……。

(んん？なんか……力と魔力以外のステが……)

「ディオニユス様、なんか、思ってたほど伸びてない気がするんですけど」

ゴライアス、グリーンドラゴン 木の 竜の討伐と中層の探索。

そりゃ、下層に比べれば過酷さや危険は少なかったが、それでもゴライアスと木竜を討伐したことも加味すれば力と魔力以外にももう少し上がってもいいはずだった。

「ふむ……」

考え込むディオニユス。

「もしかすると……君の『シルヴァーグロウ不落要塞』は、経験値が貯まりにくいのかもしれないね」

「と、言いますと？」

「君の魔法の効果は、物理の完全無効化だろう？つまり、魔法の発動中は怪我也ダメージも無いわけだ」

「ほうほう」

「そしてステイタス……とりわけ耐久に関しては、受けたダメージがそのまま経験値に繋がるから……」

「あく、なるほど」

そういうことかあ。

前は魔法を使える回数が少なかったから、少しぐらいの怪我をしても温存していた。だから、特に耐久の増えにくさを実感することは無かった。

だがLv4になってから、ステイタスでのゴリ押しが可能になったことで魔法の使用を強いられることも減った。そのうえ、魔法自体の使用可能回数も増えたことで、1回ぐらいなら割と雑に使うことが出

来るようになった。

そのため、ダメージを受ける回数がかなり減ってしまったというわけだ。

深層にでも行けばもっとダメージを受けることは間違い無いのだが、正直もう御免被りたい。いくらLv4でもあそこは地獄だ。少なくともウチのファミリアが潜って良いような階層ではない。あんなのはもう懲り懲りだ。

「そして器用と敏捷に関しては、魔法を使っている時は回避も受ける技術も、相手の攻撃を見切った技も必要ないから、上がりにくいというわけだ」

「それこそ、丁度上質な経験値が手に入るゴライアスと木竜には魔法を使ってるから猶更って感じか」

まさかの事実である。

魔法を使わなければ安定しない程の相手に勝っても、肝心の経験値はほぼ得られないとは。

(Lvが上がったことで表面化する問題もある…てコト!?)

内なるちいかわが出てきてしまった。

いや、正直舐めてた。「魔法使って攻撃受けとけば実質耐久無限に上げれんじゃん！」なんて思っていたが、考えてみればそんな楽な方法で経験値が溜まるわけが無いに決まっている。俺は馬鹿か。

でもなあ…それでも普通に怪我とかしたくないしなあ……。

ゴライアスを倒すだけなら最悪魔力さえあればなんとかなるんだが、ランクアップには必要な評定平均の下限が存在する。だからランクアップするには、ある程度満遍なくステータスを上げておく必要があるわけだ。理論上は力と魔力をガン上げて平均を押し上げることも出来るが、そのためにはかなりの経験値が必要になるため、現実的では無い。

経験値のことを考えるなら深層に行きたいところではあるが、ウチのファミリアでは行けないし、どうせ行くなら安心出来るパーティで

行きたいものだ。

「ライ」

「はい？」

いつになく真剣な様子のディオニュソス。

「ウチのファミリアを辞める気はあるかい？」

「つて言うんだよなあ」

「そりやまた……」

その日の夜。

俺はアイシャと数日ぶりに会っていた。

「ディオニュソス様が言うには、『いずれ君はLv5になるだろうけど、正直ウチにいたらいつレベルアップ出来るのかわからないだろう』だとき」

いや、そりやそうなんだけどね？確かに今のファミリアでは深層とかで上質な経験値を得られないからね？

俺もディオニュソス・ファミリア辞めたいってきんぎん思ってたしね？辞めたいのは辞めたいんだけどね？

でもね？

(さすがに怪しすぎるんだよなあ)

なにせあのディオニュソスだ。神にしか気付けない何かを感じ取った可能性だつてある。

いくら辞めたいと思っていたとしても、別に行動には出していないかったはず。にも拘わらずこういう提案をされるのは、あまりにも俺に都合が良すぎる。

もちろん、善神ディオニュソスとしての思考で言えば至極まともな

提案だから、俺の考えすぎということもある。

だが普通は神（あるいはファミリア）から見るなら俺が抜けることはマイナスにしかならない。単純に戦力が大幅に下がるし、他派閥を強化することにも繋がる。そうなれば暮らしのレベルもわずかに下げざるを得なくなるだろうからだ。

「確かに、アンタはあのファミリアの手に余るとはあたしも思ってたけどね」

「まあね。今はほぼ俺のワンマンチームだしなあ」

フィルヴィスも一緒に潜ることが出来ればそんなこともないんだが、さすがに死神とダンジョンは遠慮しときます。おめえの席ねえから!!

「……怒らないんだね」

「ん？ああ、うん。そうだね」

普通に考えれば自分のファミリアを馬鹿にされれば怒ったりするのだろうが、俺にファミリアへの愛着は無いに等しい。

人自体への愛着はあるのだが、ファミリア自体は今の俺にとっては約束された破滅…免れえぬ終焉そのものなのだ。

だから、ファミリアを馬鹿にされたとしても、軽んじられても正直何も思わない。

それにまあ、あの主神だからね……。あの主神のために怒る気にはなれないよ。

「アンタはオラリオに来た時からディオニュソス・ファミリアだろう？愛着とか無いのかい？」

「うーん……人自体には愛着あるんだけどね」

「アンタから聞いた話だと、主神も含めて良いファミリアだと思うけど……」

まあ、だって今のディオニュソスは俺たちの前ではなーんにも悪い事なんてしてないからな。

それこそ、俺が真実を告げても誰にも信じられる事はないだろう程に、善神として信じられている。

「良い人ばかりではあってもさ。ウチのレベルじゃ下まで潜れないから経験値の効率が悪いんだよなあ…」

「それなら、いつそウチに来るってのはどうだい？」

「……本気で行こうかな」

「ちよつと。本気にするんじゃない。ただの冗談さ」

いやいや、正直完全に無しというわけでもない。

あと数年で消えるファミリアだし、あの化けガエルがいるなら深層へ行くことも可能だろう。

あくまで本当に最後に最後の手段ではあるというだけの話だ。

「分かってるって。俺もイシュタルは流石に嫌だし」

まあ、アイシャとしてもイシュタルと会わせたくなんて無いだろう。俺も会いたくないし、アマゾネス達に貞操を狙われるのもゴメンだ。

特にあのカエルには。今狙われたらさすがにまだ勝てない気がするしな。アレがLv5なのこの世のバグだろマジで。第一級以上はああいうバケモンみたいなやつがなれないようにしてくれ。きもくて強いのがいつちゃん最悪だから。

「ふうん。それって、あたしと一緒にファミリアは嫌ってことかい？」

「いやいやいやいやいや、そう言うわけじゃなくてだな」

何だこいつ可愛いな。

私とお揃いは嫌ってこと?!?みたいなこと言うんじゃないよ。可愛いな。メンヘラかよ。

(あ、今のうちに確認しとかないと)

「てか、それを言うならアイシャが抜ければいいじゃん」

「!!」

この探りは、わざと踏みに行つた地雷だ。踏んで爆発する危険があつても確認できる時にした方が良く考えたからだ。

原作では、アイシヤは妹分の命を守るために、超大事なものをぶつ壊して団長とイシユタルにガチグレされてボコされた。その上首輪として、アイシヤは『魅了』によつてイシユタルに逆らえなくされるのだ。

そして、俺が地雷を踏みに行つたのは、この事がもう起こつたのかを確認するためだつた。

もし事が起きた後なら問題は無い。だが起きる前だと、俺がこうして会つたりすることで、事が起きなくなる可能性があつた。

だが、この反応ならば既に事が起こつた後だと考えても間違いないだろう。

薄々そんな気もしていたが、『儀式終わってました〜』とかなると原作が崩壊しちゃうからね。念のための確認は大事。

「……そうだね。いつかはね」

(うんうん。やっぱさすがに話してはもらえないか)

話してもらいたい気持ちはもちろんあるんだが、困つたことに俺は話さなくていいとも思っている。

アイシヤは『アイシヤ自身のことは自分の力で』他人に依存するのは甘え』的な性格や考え方を持っている。ベルを欠いた状態でアンフィス・バエナと遭遇した時の内心のセリフに、アイシヤのこうした気高さなどの魅力が詰まっていると聞いてもいい。

だから、俺に相談しないアイシヤを求めているが、普通の男として相談して欲しいというジレンマがあるというわけだ。

ほんま良い女やなあ。

「それはそうとして、あんたは飲まないのかい?」

「いや、俺は禁酒してるから」

「へえ…そりやまたなんでだい?」

「あ、そうなんだよ、聞いてくれよ。昨日までダンジョンに行ってたんだけどさ」

「18階層だろう?」

「そうそう、それで……あれ?この話したっけ?」

「いいや。ただ、あたしたちは愛でつながってるから、分かったってだけの話さ」

「ええ……」

(何それコワイ)

なんだそりゃ。変なスキルとか出たりしてないだろうな……。

いやでも、アマゾネスの嗅覚とか直感みたいなものは馬鹿にできない。

フィンの絡んだテイオネがいい例だ。あれマジ意味わからん勘の良さしてるんだよな。

「愛ってそんな機能無かった気がするんだけど……」

「あたしたちの愛にはあるんだよ」

「無敵かよお前。何でも愛で片付けそう」

「愛は世界を救うのさ」

「愛・アム・ヒーローってか?」

「ちよつと何言ってるのかわかんない」

「しばくぞお前」

そんな感じでしばらく話した後。

まあ結局いつも通り、愛だけでなく体で繋がった↑上手いこと言っ
たつもり